

発達の世界

“あんまりお役に立たない” 発達のお話

第2回 “自分づくり” を支える構造

人間発達研究所 中村隆一

なかむら りゅういち / 1954年生まれ。大津市で乳幼児の発達相談に長年携わる。現在、立命館大学教授、人間発達研究所所長。著書に『発達の旅—人生最初の10年旅支度編』（クリエイツかもがわ）など



第1回では、「発達保障」ということばの登場のいきさつを振り返りました。この中で、発達を「自分づくり」ととらえて、そこから見えてくるものを考えてみました。今回は、「自分づくり」という面から見た場合、「発達の保障をする」ということはどういうことか、を考えてみたいと思います。

■水面下の営みの存在を忘れない

突然ですが、滋賀県の県鳥は、カイツブリ、です。私も実際のカイツブリを一度みたことがあります。想像以上に小柄で驚きました。そしてカイツブリは、雛が生まれた直後は雛を背中に入れて子育てをしています。子どもを背中にのせて水面に浮かんでいる様子は、けなげでさえありました。そして、しばらくしてようやく気づいたのは、表面的にはのんびり浮かんでいるカイツブリなのですが、水面下では忙しく水かきを動かしている、ということ。つまり、波任せ、流れ任せで、同じ場所に浮かんでいるのではなく、流れの中で水かきを一時もとめずに同じ場所を確保しているのです。

私たちは、水面下の動きを見ずに「やっぱり鳥は気楽やな」などと無責任に話していたのです。しかし、実際には、たえない水かきの動きがあつてこそ、なのです。

ここで、第1回の終わりで述べた発達の水面下の動きをとらえることのできるダイナミックな方法・ツールが必要とされるのです。

■発達と働きかけの関係

今日でも「知能指数」が用いられていますが、こ

ところで、そうするともう一つ難問が生じます。そのようにしてすでに「自分づくり」がすすんでいるのであれば、教育や保育などの介入は、余計なこと、意味の無いこと、なのではないか、という疑問が出されるのです。

これについて、田中昌人氏は近江学園の中で、非常に興味深い議論を深めます。つまり、両者をいったん区別し、その上で両者の関係を検討するという方向です。

たとえば乳児期の発達は、過剰している生活環境、季節の影響が強く表れるといわれます。しかし、細かく見ていくと、何度も、その季節差の影響が消失する場合があります。しかし、発達が環境の影響をうけるとい議論だけで理解しようとする、その影響の消失がうまく理解できません。そこで、この季節差の消失点を、仮に「発達の質的転換期」と考えてみてはどうだろう、と議論をすすめたのです。「発達の質的転換期」は、文字通り発達の仕組みが大きく変化する時期ですから、いったん環境の変化の影響がリセットされるという解釈もなりたちます。その後次の質的転換期まで環境の影響をうけるのではないか、ということになるのです。これによって、教育や保育の働きかけを受けて発達に影響を与えるか否か、という不毛な議論から、その働きかけがどのような発達の根拠をもつのかを問う議論にと一步をすすめることができたのでした。

■発達の働きかけ場面で成立する関係

ところで、発達への働きかけは、当然そこでなんらかの人間関係が生じます。「自分づくり」の営みが一生継続とすれば、このような発達を支えよう

の「知能指数」では、表面的な変化に左右されない数値であることをねらっています。ちょうど、カイツブリの水面下の動きをわざと無視するようなものです。ですから「知能指数」では、実際の発達はとらえられません。行き届いた福祉や教育や医療、療育を保障しないで「発達をしない」とのべ、あるうことか、「教育や医療は無意味だから」とその引き下げを求めてくる、これが「発達保障」ということばが登場した当時の状況でした。

ですから、発達の水面下にも目を向け、「そこに、自分づくり」をしているひがいる」というように、自分づくり（発達）という枠組みがことさらに、重要なのでした。



あれまだここにいるわどこにもいかんと1日中何してるん?

そんなことおまへんこれでも結構苦労してるやで